モンスターハンター　～輝く季節へ～

如月 俊弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
モンスターハンター　～輝く季節へ～

【Ｎコード】
Ｎ０１９４Ｚ

【作者名】
如月　俊弥

【あらすじ】
大いなる大地、遥かなる空、その中に生きる人々達やモンスター達、それはすべて自然の恩恵を受けて生きてる。大きな世界の中の一人の少年の物語。さまざま人と出会って色々なことは学んで成長していく、シリアスあり、笑い・ネタあり、涙あり（・・・あるかな？）のストーリーがここに始まる。

第一話　リヒト（前書き）

初投稿・処女作品です。一人のハンターの成長をギャグ（多々のネタ）あり・シリアスありで描いていくです。
誤字脱字の指摘や感想をお待ちしております。

第一話　リヒト

木々が立ち並び、山脈に沿って流れる川、むき出し岩肌
それ一つ一つ荒々しく自然の営みをかもしだしている

「ふぅ、これで終わりっと」

その渓流の中に額の汗を軽く拭きため息をつく少年がいる
彼はリヒト・フィリング2か月前に街の訓練学校を卒業したばかりの新米ハンターである。

「今回は運が良かった、それにジャギィ相手にもだいぶ慣れてきたみたいだし」

足元にオレンジ色の体に背中に紫のラインが入ってる小型の肉食性の鳥竜種が倒れている
今彼が受けているクエストはジャギィ5頭の討伐である
基本ジャギィは群れで行動しているのだが今回は一頭や二頭づつで行動していたため
普段手こずる相手でも容易に倒すことができたのだ
戦闘で刃こぼれしたボーンククリを研ぎ直して腰に戻し

丁寧に剥ぎ取りを始めた。

「一通り回ったしそろそろ、村に戻ろうかな」

ベースキャンプに向かって歩きだした。

それを見る一つの陰に気が付かずに。

第一話　リヒト（後書き）

戦闘シーンがうまくまとまらなかったのでスルーしちゃいました（^^；

これから少しづつ書いていこう思いますのでよろしくお願います。

第二話　エルファロ村（前書き）

1週間ぶりです。

投稿は週1くらいにしていこうかと考えてきます。
無理に期日を短くしちゃうと後が大変そうなので
では第二話です。どうぞ

第二話　エルファロ村

山間にある小さな村それがリヒトの故郷であり拠点のエルファロ村
まだ村が立ち上がって２０数年と言うまだ若い村だが
東方とロルメルトの間に位置し山間とゆうモンスターに襲われにくい場所にあるため
キャラバンなどが東方や都市に行くための中間地点の役割を担ってる村である

「よぅ、お疲れさん」

不意に声をかけられ振り向くと自称門番のアルトが門の前に座っていた。

「あっ、アルトさん」

リヒトはそばまで行きアルトの隣に腰をおろす。

「お前が訓練校から帰ってきてもう2か月か、ハンター生活には慣れたか？」

「ええ、ジャギィやジャギノスくらなら大丈夫ですけど、大型モンスターなんて無理ですよ」

「俺ら一般人からすれば大したもんだよ、ジャギィでも怖いからな」

「そうは言っても俺もまだ怖いですよ。囲まれると大変ですからね。」

「それでもすごいさ、それにお前はこの村の唯一のハンターなんだから大怪我だけはしないでくれよ」

「わかりました、ではそろそろ村長のとこに行きますね」

リヒトはそういって立ち上がる

「そうか、じゃ俺は引き続き見張りとゆう名目の仮眠を続けるとしよう」

そう言って門にもたれてしまった。

「それは見張りにすらなってませんよ」

リヒトは苦笑をもらしてまう

アルトは気にした様子もなく目をつぶってしまった

それをみて、相変わらずだなと思いながら村長のところに向かって歩きだした

エルファロ村の中心には樹齢数百年ともいわれる大きな木があり、その木を中心に村を作っている

木には縄がまかれており御神木として祭られている。

村長はいつも木に下にいる為探さなくてもすぐ見つかるのだ。

「おかえり、リヒト君」

容姿端麗だがリヒトやアルトより耳が大きく垂れて女性がいた。

彼女は竜人族であり人間や獣人族とは種族で

鍛冶や調合などの高度な技巧を備えた争いを好まない種族である

「村長以来のジャギィ5匹終わりました。」

「ありがと、報酬は酒場で受とってね。あとで・・・ちょっとお話があるんだけどいいかな？」

村長は困ったような顔で口を濁らせた

「話ですか？いいですよ」

不思議そうに返事をするがここでは言いにくいことなんだろうとわりきり深くは聞かなようにした

「帰ったばっかりで疲れてるのにごめんね、落ち着いたらでいいから私の家にきてね」

「わかりました。後でうかがいますよ」

リヒトは話の内容に気になりながらその場を後にした。

村唯一の酒場は簡易ギルドも兼ねており、リヒトはここで依頼を受

注している。

「リヒト君帰ったんだ。どうだった？」

酒場の店主であるファラスが声をかけてくれた。

「今回はわりと楽にできましたよ」

「そうかそうか、リヒト君もハンターらしくなってきたな」

「そうですね。前はジャギィ３匹でも一苦労でしたからね」

笑いながら答えるとファラスがハチミツミルクを出してくれた。

「今日は俺のおごりだ。あとこれが報酬な」

「ありがとうございます」

そういってミルクを飲む

「やっぱり、ファラスさんのハチミツミルクはおいしいですね」

「うれしいことといってくれるじゃないか、うちのは厳選したポポミルクとハチミツでつくってるからな」

「おいしいわけですね。御馳走様でした。」

のこりのミルクを飲み干しで立ち上がる

「もう行くのか？」

「ええ母にも報告と村長にも呼ばれていますので」

「そうか、なら仕方ないな」

そうゆうとファラスは納得した様子でうなずいた

「また来ますね」

リヒトは笑顔でそういい酒場をでていった。

第二話　エルファロ村（後書き）

どうでしたか？今回は主人公の拠点となる村に書いてみました。
文字数も前回よりかなり増えたと思います。
誤字、脱字のご指摘がありましたらよろしくお願いします。

第三話　異変（前書き）

こんばんは？
３Ｇが発売しましたね。
現在３Ｇは村メインでやってますが、水中は動きずらいですね
カメラワークミスると死角を多くなるし、距離感つかみにくいし^^；
とりラギア狩猟しました^^
でもモンスターのあたり判定がさらにぬるくなってる気がする。。。？

ともかく第３話です。

第三話　異変

酒場を出たあと村の診療所むかい歩き始めた

診療所は酒場の向かいに位置し、村唯一の医療機関であり

「ただいま、誰もいないの？」

そしてリヒトの実家でもある

「ああ、おかえり帰ってたんだ」

奥からひょっこり顔のぞかせた

「今帰ったとこだよ、普通怪我はなかったとか言わない？」

「この辺だとジャギィとかファンゴとかだから心配のしようがないさ」

「そうだけど、信用されてるってことでいいのかな？」

「それは想像にまかせるわ、一応汗は流しとくんだよ」

「わかってる。村長に呼ばれてるから着替えたら行ってくるね」

「了解、じゃ私は薬の調合に戻るから」

そういって奥の部屋に入ってしまった。

母さんも相変わらずだなと苦笑を浮かべてた

その後、汗を流して私服に着替えた後村長の家に歩みを進めた。

「リヒトです。村長いますか？」

村長の家につくと声をかけると奥のほうから

「どうぞお入りになって」

声が聞こえたので、中に入ると村長の他にファラスがいた。

「おお、リヒト君かちょうどいい時に来たか」

「そうですね、ではリヒト君おかけになってくださいな」

何故ファラスがいるかと不思議に思いながら椅子に腰をかける

「ごめんなさいね、狩りの後来てもらって急ぎの話がありましたので」

「いえ、気にしないでください。でも何故ファラスさんが？」

まだ酒場にいるはずのファラスがここにいるのか聞いてみると

「俺は村長に話があって来たんだよ、そこにお前が来たわけさ」

「そうなんですか、絶妙なタイミングですね」

経緯に納得してうなずくと

「早速ですが、リヒト君を呼んだ理由をお話しします。」

「俺も同席させてもらうぞ」

いつにもまして真面目に話す2人をみて表情を引き締める。

「はい」

「リヒト君も知ってるとおり、チアロ渓流でジャギィやジャギノスの数が中々減らないのはご存知ですよね？」

「ええ、ここしばらくで３０匹は狩りましたが中々へらないですね」

リヒトは相打ちを打つ。

「そこでチアロ渓流の調査をお願いしたいと考えていたんですが、先ほどファラスさんからお話を伺うと・・・」

村長はそこで口を濁させた。

「後は俺が話そう」

ファラスが口を開いた。

「簡潔に言おう、今チアロ渓流にはドスジャギィがいるんだ、それをリヒト君に狩猟してもらいたい。」

「マジですか・・・？」

「マジだ、あの後キャラバンが来てドスジャギィと出くしたがなんとか逃げてきたと言っていたからな」

「この村には街には依頼を出す余裕もないからリヒト君しかいないの、お願いしますわ」

村長が頭を下げた。ここまでさせると断れないし、

何よりこの村を守るためにハンターになったのだ。

リヒトには断る理由がなかった。

「わかりました。倒せるかどうかわかりませんが、めいいっぱいやってみます。」

そう答えると、2人がほっと息を下した。

「頼んだぞ、こっちもできるだけ準備をさせてもらうからな」

「必要なものがあれば言ってくださいね」

「はい、今から準備に取り掛かりますね」

そういって早速自宅へ戻ろうとすると

「まだ渓流について日が浅いみたいですので明後日に出発お願いします。」

「そんなにゆっくりしてていんですか？」

驚きを隠せないでいるリヒトをみて、

「ほんとなら明日にでも行ってもらいたいんだが、念入りに準備してもらいたいからだよ」

確かに新人ハンターの自分には中型モンスターのドスジャギィは荷が重いかもしれない、

なら下準備を念入りにしなくてはそのまま死つながりかねない。

「ありがとうございます。明日一日しっかり準備させてもらいます」

そういって村長の家を出て自宅に帰り準備を始めた

「まずは武器を強化しないとな、素材はと・・・」

皮袋に素材を詰めて家を出た。

村の横を流れる川の近くに鍛冶屋がある

「いらっしゃいってリヒトじゃないか、武器の強化かなそれとも防具？」

そういって一人の女性が出てきた

「あっクリスさん、ククリを強化したんですがいいですか？」

そういって皮袋ごと素材を渡す

「十分すぎるくらいあるね、兄貴から話を聞いてるが明後日ドスジ

ャギィと戦うんだろ？」

クリスはファラスの妹である。

「聞いてましたか。武器はちょっとです強いほうがいいかなと思って奮発しちゃいました。」

「武器と防具は大事だからな、最優先にやるから明日にはできてるが・・・」

クリスはそこまでいって話をやめた。

「どうしたんですか？」

「ついでに今使ってるハンターシリーズだったけ？あれを持ってこい一緒にメンテしといてやる」

「いいですよそんな」

武器を強化してもらってるのに・・・と遠慮するが

「防具もメンテしてやらないと動きにくくなったりすんだぞ、それにしばらく作ってると劣化もあるからな調整しとかないと狩猟中に壊れたら困るだろ？」

「わかりました、よろしくおねがいします！」

「じゃ明日の夕方には全部できてるから取りに来てくれ、」

第三話　異変（後書き）

どうでしたでしょうか??
戦闘はまだかって?すみません次回くらいに予定してます><
もうしばらくお待ちください
次回はドスジャギィとの戦闘をちょっと書く予定ですが
ちゃんと書けるか心配です><

誤字脱字ありましたらご指摘お願いします

第四話　渓流の狩人（前書き）

前回に戦闘シーンを入れると公言しちゃったので
無理やり感がありますが
なんとかハンティング開始です

ではどうぞ

第四話　渓流の狩人

鍛冶屋と後にしたリヒトは自宅に戻っていった。

「ただいま、」

「おかえり、村長に話は聞いた？」

家に入った途端先ほどの緊急のクエストの話を言われ驚いてしまった

「えええ！なんで知ってるの？ついさっきの事だよ！？」

「それは禁則事項だね。」

母親は人差し指を口元にあてて答える。

「ドスジャギィが相手か仲間を呼ばれたら厄介だからね。」

「そうだね。ジャギィの動きも統率がとれるらしいからね」

「まぁ、リヒトならどうになるんじゃない？後、雑誌来てたよ」

そっけなく答える母親を見て

「いつもながら適当だね」

苦笑をしながら答える。

「心配したって仕方ないさ、自分で選んだんだからね、やるだけや

ってみな」

「信用はされてるんだね」

「そうゆうこと。今日はさっさと寝な」

「狩りに生きる見たら寝るよ」

そういって自室に帰っていった。

「こっちも準備でもしてやるかな」

そうつぶやき調合部屋にはいっていく。

「月刊狩りに生きる」ハンター用の雑誌であり様々の狩場の情報や武器の特性、モンスターの情報などが乗っているためルーキーからベテランまで幅ひろい人気を誇っている雑誌である。

「今回は・・・スラッシュアックス特集か2種類の武器で戦ってる感じがしてよさそうなんだけどなんか難しそうだよな」

パラパラとページを捲っている

「ん？〔変形はロマンだ〕か・・わからないことはないかな」

そう笑うとベットに横になり眠りについた。

翌日目が覚めると昼前になっていた。

「もう昼って寝すぎじゃないか・・・？」

そうボヤきつつ遅い朝食を食べにリビングに行く

「やっと起きたんだ。それだけ神経が図太ければ大丈夫そうね」

呆れ顔で言われ、笑うしかなかったリヒトである。

「あとテーブルに置いてあるやつもってきな」

そういわれテーブルに目をやると、緑色の液体が入った瓶がいくつか置いてあった。

「これ回復薬？」

「グレートよ、もしも為にもっていきなさい」

心配はしていないといえど親は親なので本当のところは心配してくれている。

「ありがと、持っていくよ。」

「そうそう、あんたのハチミツ何個か使ったから気にせずじゃんじゃんつかなさい」

笑いながら言うと背を向けて店に入っていった。

「結局、俺の素材で作ったんだ。作ってくれただけ感謝しておこう。」

そう納得して朝食を食べる。

「夕方ってクリスさん言ってたな、まだ時間あるし準備を整えとこう」

そそくさと朝食を食べ終わると狩猟の準備を始めた。

「閃光玉と回復薬・・・・砥石っと、こんなもんかな？って結構荷物おおいなこれ」

初めての大型モンスターなので狩場に持ち込める荷物の量のほぼいっぱい準備してまっている

「多ければキャンプにおいとこう、そろそろ夕方になったしクリスさんのとこに行こうかな」

家を後にして、クリスの鍛冶屋に向かう

「こんにちは、リヒトです。」

声をかけるが返事が返ってこない

「いないのかな？クリスさん？？」

もう一度呼んでも返事がないためどうしようかと悩んでいると後ろから肩をつかまれた。

「ひゃう！！・・・」

よくわからない悲鳴を上げて飛び上がる

「な、なんだクリスさんかびっくりさせないでくださいよ」
「なんだとはなんだ、人の店の前にいるから声をかけただけなのにそこまで驚かれるとショックだぞ？」
「ご、ごめんなさい不意だったのだったので・・・」
「あれを取りに来たんだろ？中に入んな」
まだ落ち着かないでいるリヒトを見て笑いをこらえながら、店の中にはいる
「お茶でも出すからその辺に座ってな」
そう言い残しクリスは奥に入っていった
「さっきのはワザとしたよね。気のせいかな？」
なんとか落ち着いて、先ほどの事を考えているとクリスが戻ってきた
「なかなかいいリアクションだったね、面白かったよ。」
お茶を出しながらそう言う
「やっぱりわざとしてたんですね」
ため息をつくとを
「力んでたら実力が出ないからな、息抜きさ」

「なんか逆に疲れましたよ」

「そうか？それは残念だ。預かってるのは後ろに後置いてあるから着てみてくれ」

後ろを振り向くと白い布を被せられた防具がある。

布を取ると新品同様になったハンターシリーズとボーンククリ改があった

「し、新品みたいですね。」

「それは私もプロだからね、そのくらいはできないとね。」

そういって苦笑を漏らしながら装備を付けるのを手伝っていく、

「装備が軽いし動きやすい。新品・・・それ以上ですよ」

興奮気味のリヒトを見ながら

「大分、汚れや錆が溜まってたからね、それを取ってククリの強化で余った鉄鉱石を使って強化させてもらったから前よりは多少強度も上がってるはずだよ」

「そうなんですか？ありがとうございます」

あまりにも嬉しそうに答えるリヒトをみて自然と笑みがこぼれてしまう。

「私ができるとはやった、後はリヒトの仕事だから頼んだよ」

「はい、必ず成功して見せます」

歯切れの良い返事にクリスは安心し席を立つ。

「私はそろそろ寝るわは、明日の準備は終わってるんだろ？早く帰って休みな」

そういって店じまいの準備を始めたのでリヒトも席をたち店を後にする。

「クリスさん、ありがとうございました。」

改めそう言うと、

「今度はもっといい装備を作れせてくれよな」

そう答えて右手を挙げた

その後家に帰って狩場への荷物の確認をしてベットに横になった。

翌日アプトノスの馬車に乗って狩場に向かうリヒトの姿があった

狩場には飛躍的安全でハンターの拠点となるベースキャンプがありそこに簡易ベットや支給品ＢＯＸなのどがありそこで休んだり、負傷などの緊急時に看護アイルーがハンターを連れてきてくれるのだ。

ここチアロ渓流のキャンプは岩場にあるが、風通しがよく岩影にベットがあるためとても過ごしやすくなっている。

「ジャギィは大体2番あたりに多いからそこから行ってみようかな」
狩場は地図上でエリア分けをされており各エリアに数字が入れられてある
行きなれている狩場の為地図なして移動してる。
ガーグァなどがいる水辺のエリア1を通過して崖のあるエリア2に移動するとジャギィが3匹エリア内をうろついている。
「こいつらは見張りか??」
物陰に隠れて様子を窺がう
ドスジャギィがいるとジャギィたちの役割が分担され組織的な動きを取るようになるのだ
「ここは先手を打つって様子を見るか」
後手に回ると数で押させかねないと判断して物陰から飛び出して一番近くにいるジャギィに向かって走る
不意に出てきた相手に驚くにジャギィに向かってジャンプし腰から抜き放ったククリ改を振りおろし
厚いとは言えないジャギィの皮と切り裂き赤い血が噴き出す、たまらず後ろにのけぞるジャギィ、リヒトは続けざまに振り下ろした剣を切り上げに2発目を当てるとジャギィ吹っ飛び力尽きる
「ギャアッ！　ギャアッ！」

仲間をやられたジャギィが怒り一声吠えてリヒトに走ってくる、
リヒトもそれに応戦し片手剣を振り下ろすがバックステップでかわされ咬みついてくる
リヒトは横に転がりそれを避けて立ち上がりと同時に装備している左手に装備した盾で殴りつける
たまらずひるんむ相手に左足を軸にして回転切り叩き込もうするがもう一匹のジャギィが身を挺してかばい血しぶきが飛びひるむその隙をついて距離を取るリヒト。
「援護に入ってきたか、応援を呼ばれる前に片づけないと」
二匹と睨み合い、先にリヒトが血の付いたジャギィに走った。

第四話　渓流の狩人（後書き）

初めて戦闘シーンを書いてみましたがやっぱり難しいです

もっとこうしたらいんじゃない？とかアドバイスがあればよろしく

お願いします。

第五話　狗竜（前書き）

年末が忙しく遅くなってしまいました。

しかもかなり短いです><

第五話　狗竜

それを見てジャギィはバックステップて下がり距離をとってから噛み付きにうつる

「よっと」

噛み付きを横に転がり回避し切り付けるとジャギィが少し飛び力つきる。

入れ代わりにもう一匹がリヒトに体を軸にしっぽをたたき付ける

ガキンッ！

反射的に左手の盾でガードするが勢いをころし切れず少しのけぞってしまう

ジャギィはバックステップで距離をとった

「危なかったな」

体勢を立て直してそうつぶやく

「でもこれで」

ジャギィに向かって走っていきジャンプともにククリ振り下ろす

ジャギィの鱗を貫通し致命傷となり力尽きる

三匹を片付けリヒトは剥ぎ取りを行ってその場から離れた。
すぐに移動しないと他のジャギィ達が集まってきてしまうからだ。
「強化すると大分楽になるな」
砥石でククリを研くと腰に戻しエリアを移動する。
その後もエリアを回ってもドスジャギィと出会うことがなく時間だけが過ぎていく。
「・・・いないのかな??」
その場にに腰を降ろして呟く
ジャギィやメスのジャギィノスには会うものの本命のドスジャギィには会うことができない
「いったんキャンプに戻ってみようかな」
リヒトは腰を上げて移動を始めると先ほどエリアから一つの影が移動してきた。
振り向き目を凝らしてみるとジャギィノスより大きく耳のあたりに大きなエリマキがついてる。
「ドスジャギィ!!」
そう叫ぶとククリを抜き放ち走っていく。

リヒトに気づき威嚇をする。

「アッアッオーーウ！」

その声に反応し3匹のジャギィが現れてきた。

リヒトはかまわずドスジャギィに向かって走りポーチの中にあるペイントボールを取り

ドスジャギィに投げつけると特徴的な強い匂いとドスジャギィの身体の一部がピンク色染まる。

これは相手がほかのエリアにいてもわかるくらい強い匂いであるのでマーキングに使われている。

いったんドスジャギィより間合いをとり改めて睨み合う。

第五話　狗竜（後書き）

モンハンでなかなかターゲットに会わないことがあるのでそれをちょっと書いてみました。

あれはイライラしますよね＾＾；

ＭＨ３Ｇは村の緊急ラギア亜種クリアを今年中に完了できました

ネブラＳに猫アックス強すぎですね＞＜

回避性能＋１つけてるとほぼノーダメ可能って性能よすぎじゃない？

では今日はこの辺で。。。

みなさんよいお年を＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0194z/

モンスターハンター　～輝く季節へ～

2011年12月31日18時45分発行